

思考や判断力問う

公立高特別選抜 大阪の地名題材

府内の公立高校で20日に行われた2018年度入試の特別選抜は、大阪の地名など身近な題材を用い、思考力や判断力を問う内容だった。問題はA、Bの2種類あり、A問題は学び直しに力を入れる「エンパワメントスクール」などが、B問題は体育や音楽などの専門学科がそれぞれ採用した。21日は面接などが行われ、28日に合格発表がある。

国語 昨年に比べて問題数や記述量が増

え、漢字は「書く」より「読む」を重視した。大問1では、授業で発表する原稿作成に関する問題が出た。現代文では筆者の意見をつかむ力、古文では情景を想像し、選択肢の違いを見極める力が必要だった。

英語 傾向は昨年までを踏襲し、英文の量はほぼ同じ。ただ、英訳は分量が減るなど、難易度は若干下がった。英作文は一定のテーマや条件下で自分なりの考えを表現させた。昨年より語彙力を要求していた。

A問題 基礎的な問題が中心。国語はB問題と同じく、授業で発表する原稿作成に関する問題があり、文章表現の工夫を試す問題も増えた。数学は小学校で学ぶ内容もあった。英語は選択問題の中で、基本的な語彙や文法が問われた。

関西を中心に展開する進学塾「第一ゼミナール」に、B問題を中心に各教科の出題の傾向を聞いた。

数学 傾向、難易度とほぼ昨年並みで、基礎学力を固めていれば取り組みやすい。大問1、2は各単元の基礎を幅広く試し、大問3は規則性を考えさせた。大問4は相似な三角形に着目して線分の長さや面積を考えさせ、後半の2問はやや難度が高い。

理科 中学校で学ぶ分野からほぼ均等に出题された。教科書に載った語句を問う問題が増え、全体的にやや易しくなった。

公民分野の出題がやや多かった。基本的な語句や人名を尋ねる問題が多いが、暗記力だけでなく、資料やグラフから必要な情報を読み取る力、適切に表現する力も問われた。